2023年11月26日 久宝教会 礼拝メッセージ

「アルファであり、オメガ」　　水谷憲牧師

聖書　ヨハネの黙示録 1章4−8節

今日の聖書は、新約聖書の「ヨハネの黙示録」。新約聖書の中でも特に理解しにくい、ややこしい印象の書物であります。これは、今日の聖書の冒頭にもあるように、著者であるヨハネ、このヨハネはキリストの12使徒のひとりであるヨハネであると、もともとは考えられてきましたが、一方でこの書物は全く別の人物がそのヨハネの名前を借りて書いただけだとも考えられてもおり、要するに良く分からないということなのですが、いずれにせよこのヨハネと名乗る人物がアジア州にある7つの教会にあてて書いたものであるとされています。このアジア州というのは、今私たちが考えるアジア大陸のことではなく、当時のローマ帝国の管理下にあったアジア地方、現在でいうトルコ共和国の西側にあたります。そのアジア州の7つの教会、エフェソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキア、なぜこの7つの教会が選ばれたのかというと、これらの7つの都市は、当時の7つの郵便配達区域の中心であり、この地方を回る環状道路に面していたため、これらの都市に配達された郵便物は、そこから周辺の地方に配られていった、ということらしいので、この手紙も、それら7つの教会からさらに周辺の諸教会に回覧されていったものと考えられます。2:7には、「耳ある者は、“霊”が諸教会に告げることを聞くがよい」とも書かれていますし、この7つの教会の「7」というのは「完全数」とも理解される数ですから、きっとこの手紙は、7つの教会のみならず、この7つの教会をはじめとした教会全体を対象としたメッセージ、ひいては現代の、今これを目にする私たちにも向けられたものであるとも言えるように思います。

レオン・モリスという聖書学者は、この手紙が書かれた背景について、次のように想像しています。イエス・キリストによる福音は、ローマ帝国の隅々にまで、当時すでにのべ伝えられていた。ナザレのイエスこそが、神の御子、私たちの救い主であるとみな教えられていたと。「主は聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架にかかり、死にて葬られ、黄泉に下り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来りて、生ける者と死ねる者とを裁きたまわん」とは、「使徒信条」の

一節ですが、ローマ帝国の迫害にあって苦しんでいたキリスト者たちは、そのキリストの再臨の日を熱心に待ち望んでいたわけです。しかし、何も起こらなかった。教会は小さな集団であり続け、ローマ帝国にとって代わるような巨大な力にはならなかったし、なりそうもなかった。ローマ帝国には抑圧と悪が満ちていて、悪者が栄えていた。偶像礼拝、皇帝礼拝が盛んだった。少数だったキリスト者は同調しようとしなかったので激しい迫害を受けることになった。ある者は殉教し、ある者は牢に入れられた。キリストの再臨はどうなっているのか、間違いだったのか。すべて妄想だったのか。キリスト教なんて単なる幻想であり、社会的、政治的な現実という固い岩の上では粉々にされてしまうのだろうか・・・そのような問題に悩まされている教会にあてて、この黙示録は書かれた。それは、小さく、迫害され、苦しんでいる教会、自分たちのおかれている状況がこれからどうなるかを知らない教会に送られた。ヨハネはそのような教会の必要に答えるために、この書を書いたのであると。

そしてその黙示録が書かれた状況は現在にもあてはめられています。誰も核戦争、戦争など望んでいないのに、私たちの人生、私たちの命は、世界的な地獄の中で消滅する運命にあるのだろうか。そこでは、力のある政治家でもどうにもできない邪悪な悪魔的なものが存在しているのだろうか。私たちの頭の中には、ウクライナやパレスチナのことが思い浮かぶわけですが、黙示録は、このような問題に苦しめられている人々に語りかけるのだ。黙示録は、もともと権力とは何かという問題に直面している少数者に向けて書かれたのだと。そうであるならば、今こそ私たちは黙示録に向き合わなければならない、今こそ私たちは、この黙示録のメッセージに耳を傾けなければならない、今こそ私たちはこの黙示録を読む時なのかもしれません。

今日の聖書は黙示録の冒頭部分、書き出しのあいさつにあたる部分ですが、ヨハネは父と子と聖霊からの恵みと平和があなた方にあるように、という言葉に続いて、キリストに対しても栄光と力が世々限りなくありますように、とのべています。ここで注目したいのは、5−6 節「私たちを愛し、その血によって罪から解放してくださった方に、私たちを御国の民とし、またご自分の父である神に仕える祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくありますように、アーメン」というところです。まずこの私たちを「愛し」という動詞には現在形が使われています。つまり、私たちに対するキリストの愛は昔もそうだったけれども今も現在形で続いているし、

これからも永遠に続いていくのだということが示されているわけです。続いて、その血によって罪から「解放して下さった」という動詞は、日本語でも過去形ですが、ギリシア語では「アオリスト形」が使われています。英語でいう過去完了のようなものでしょうか、過去の一回において完成された行動を表している言葉です。つまり、私たちが伝え聞かされているあの十字架の出来事によって、私たちの罪が赦されたというのは、完了したことなのだということになるわけです。まとめると、キリストの十字架刑の事件、キリストはご自分に何の罪もないのに私たちの罪のために十字架につけられて葬られたという出来事、そのキリストの贖いによって私たちは、自分のいろんな醜いこれまでの罪から完全に解放された、それと同時に、それでもなお、私たちに対する神の愛は今なお継続しているのだということを、ヨハネはここでさらっと伝えようとしているわけです。

そして次の「私たちを御国の民とし」、新共同訳聖書では「私たちを王とし」と訳されていますが、私たちを御国の民とする、私たちを王とするということは、神様が私たち一人一人を新しい神の国の住人あるいは王としてくださる、つまり私たちをこれまでの力も名もない一人などではなく、新しい世界の主人公としてくださるということ、厳しいこの世界の現実、どんなにがんばってもこの世界は変わりそうにない、そういう現実は今あるけれども、それはともかく、神様が来たるべき時に作り上げてくださる御国では、私たちは主人公になれるのだということなんです。さらに、「ご自身の父である神に仕える祭司として下さった」という言葉、「祭司」というのは当時は特別な職業、エリートでありましたが、神様は私たちみんなが等しく神の御前に近づくことができるように、私たちを引き上げてくださるのだということも、ここでは示されているわけです。神様はそれだけ私たちのことを大事に、愛してくださっているのだと。

そして、「見よ、この方が雲に乗って来られる」。いつの日かキリストは、雲のようなものに乗って私たちのところに再びやって来られると言われていますが、キリストが雲に乗って再臨されるその時には、私たちはもちろん喜びますが、キリストをかつて十字架にかけた人たち――キリストを裏切り、無視し、侮辱してきた者たち――には、キリストの再臨はどんなに恐ろしいことか。「ことに、彼を突き刺した者たちは。地上の部族は皆、彼のために嘆き悲しむ」。でもそれは必ず来る。黙示録には「時が迫っている」「すぐにも起こるはず」などと書かれていますが、この「すぐ」という言葉には「突然」という意味もあるようです。すぐではないかもしれないし、

それがいつなのかは私たちには分からないけれども、それは必ず来るのだ。ヨハネはこの黙示録を通じて、私たちにそう伝えようとしているわけです。

今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者である神、主がこう言われる。「私はアルファであり、オメガである。」「アルファ」「オメガ」とはギリシャ語のアルファベットの一番最初と一番最後の文字です。「私は一番最初であり一番最後である」とは、神様あるいはキリストから私たちへの「私は始めから終わりまで、ずっとあなたと共にいる、ずっとあなたのことを見守っている」というメッセージでもあります。「始めから終わりまでずっとあなたと共にいる、あなたを見守っている」なんて、実の親でもなかなかできることではない。できたとしてもそれはだいたい子どもとの悲しい別れだったりするわけで、私たちにはほぼ不可能なことなのですが、それを神さまは「私はあなたがうれしい時も悲しい時も苦しい時も、ずっとあなたと一緒にいる」と言ってくださっているのです。

「アルファでありオメガである」でもう一つ考えられることがあります。「一番初め」と「一番終わり」とは、スポーツなどでもそうですが、特別な位置にあります。団体戦の先鋒、一番バッターなど、あるいは大将やアンカーなど、緊張や不安、重圧などがかかる特別なポジションです。そのように、私たちも自分の人生、自分の生活の中でも、いろんな試練や苦しみに直面したりすることがあります。しかし私たちは、そんなしんどさに直面するなかでも「この苦しみも私が初めてではないのだ、私よりもはるか前に、私と同じ苦しみを苦しんだ方がおられたのだ」とアルファであるキリストに慰められ力づけられるわけです。さらには私たちが試練を乗り越えることができたとしても、まだこれから先がどうなってゆくのか不安は尽きることがありませんが、しかし最終的な結果は一番最後、オメガであるキリストが責任もってちゃんと引き取ってくれるから、だから大丈夫だ、神様にお任せしておけば大丈夫だと、安心を与えていただけるのです。

この世界中で本当に苦しい状況にある人々、私たちの想像を超えるような苦しみを強いられている人々のことも思いますが、その一つ一つの苦しみ悲しみは、必ずアルファでありオメガであるキリストによって慰められ癒されてゆくことを信じます。